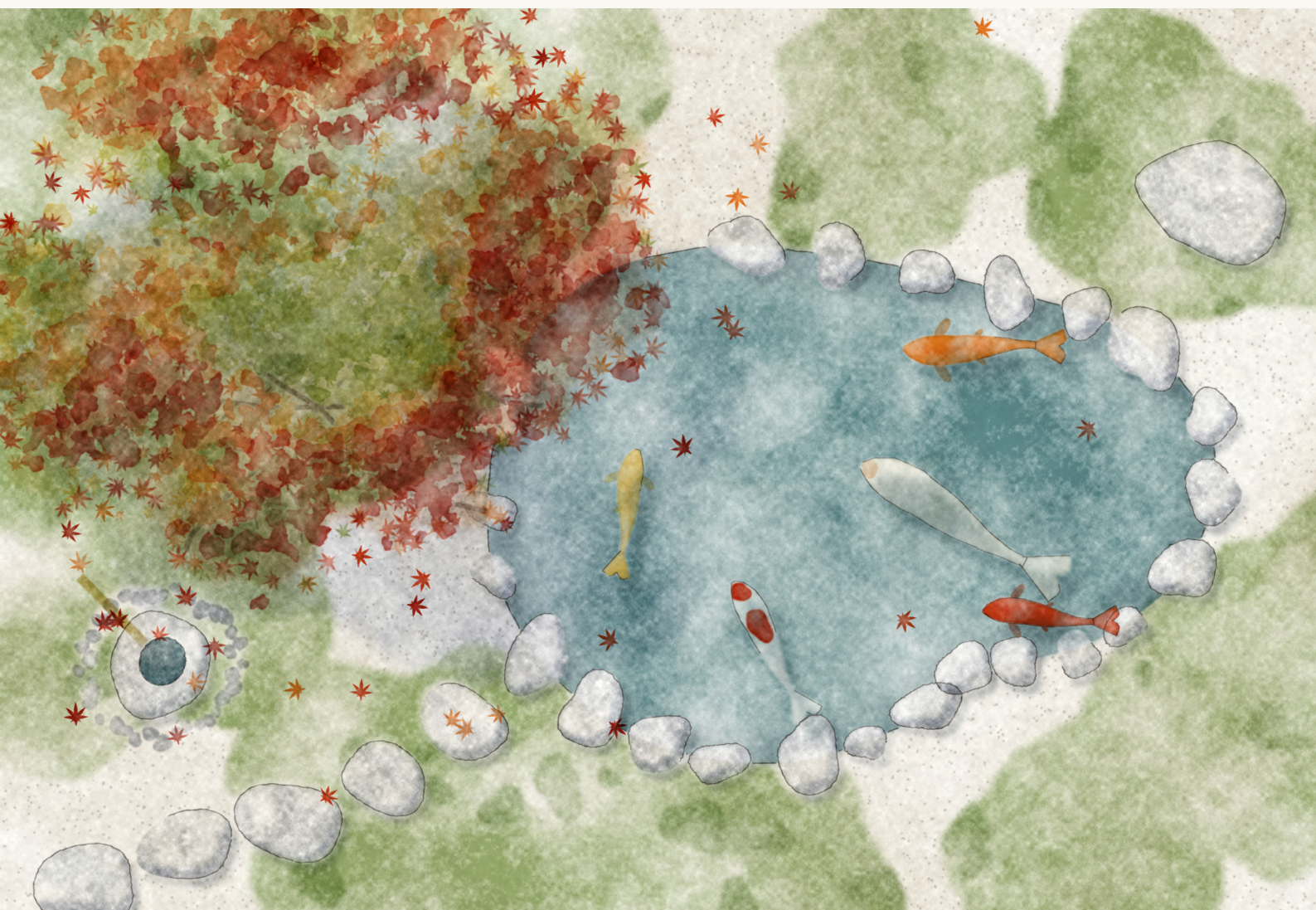


言葉の力で、人と世界をつなぐ。

つづり

Vol.87

2012 AUTUMN



創業25周年記念号

株式会社トゥトゥリガチ言語解決社 広報誌

表紙：本社中庭の秋

25

1987 - 2012

創業25周年を迎えて

代表取締役社長 大森 久雄

1987年4月、私は大阪・梅田の雑居ビルの一室で、五人の仲間とともに翻訳の仕事を始めました。きっかけは、その前の年の冬の、ある集まりでした。机が六つ、電話が二台、ワープロが三台。最初のお仕事は、ある商社様の英文契約書でした。徹夜で仕上げた訳文を、朝一番に自転車でお届けしたことを、今でもよく覚えております。

あれから二十五年。当社は東京・深川に本社を移し、デュッセルドルフに拠点を開き、翻訳だけでなく、通訳、ローカライズ、そして自社開発のソフトウェアへと、事業の幅を広げてまいりました。これもひとえに、お客様、お取引先様、そして社員とその家族の支えがあったことです。心より御礼申し上げます。

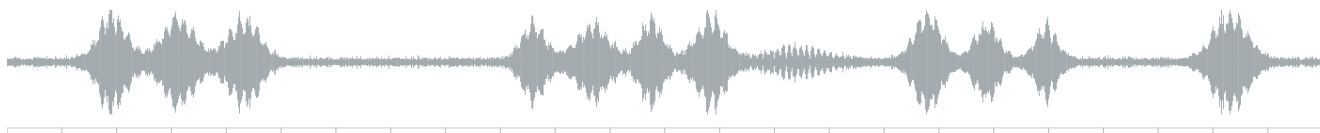
振り返りますと、平坦な道ばかりではございませんでした。とりわけこの数年は、当社にとって決して容易な時期ではございませんでした。それでも私は、挑戦したことを一度も後悔しておりません。

本年春には、シンガポール駐在員事務所を閉じる決断をいたしました。しかし、これは撤退ではございません。アジアの時代は、これからが本番です。

次の二十五年に向けて、当社はこれからも、言葉の力で、人と世界をつなぐ仕事に挑み続けてまいります。今後とも変わらぬご愛顧を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

意味のない言葉は存在するか

言語研究所 主任研究員 久住 千秋



民謡の囃子詞（はやしことば）には、辞書に載らない言葉が数多く含まれる。「ヨイヤサ」「チョイナチョイナ」「ハアどっこい」。これらは一般に、意味を持たない言葉とされる。しかし、囃子詞をすべて抜いた民謡を想像してみたい。多くの人は、歌から何かが失われたと感じるはずである。失われたものが意味でないとすれば、それは何か（注1）。

当研究所では現在、この問いを実験によって確かめようとしている。辞書に存在しない音の連なりを、日本語の拍（モーラ）と抑揚に沿って読み上げ、聞き手に「意味らしさ」と「響き」を評定してもらう方法である。予備的な結果では、聞き手は意味のない音列にも、はっきりとした感情を読み取る傾向が見られた（注2）。

興味深いのは、評定の揺れ方である。同じ音列が、ある聞き手には「悲しい」、別の聞き手には「なつかしい」と受け取られる。しかし、「何も感じない」と答えた聞き手は、ほとんどいなかった。

本年六月、梅雨の夜に、本社中庭の池で蛙の声を録音した（注3）。蛙の声に意味はない、と私たちは考えている。しかし録音を聞き返すと、その声は明らかに、何かに応えているように聞こえる。

言葉は、意味を運ぶ前に、まず息を運ぶ。

意味のない言葉は、存在するか。現時点での筆者の答えは、「意味のない言葉はあるかもしれないが、響きのない言葉はない」である。研

究の成果は、本年度中に中間報告として公開する予定である。

注1 囃子詞の分類については、別稿に譲る。

注2 被験者48名。詳細は中間報告にて述べる。

注3 音声資料4として保存。録音：金城ゆい（言語研究所）。

新しい仲間を紹介します

2012年4月3日、本社にて入社式を行い、5名の新入社員を迎えました。



佐

佐伯 拓海 (翻訳部)

「好きな言葉は『推敲』です。一語に一日かけられる翻訳者になりたいです。」



野

野口 春香 (通訳部)

「まずは、会議で一言も聞き漏らさない通訳者になります。」



高

高木 祐介 (デジタル言語システム事業部)

「ワークベンチを、もっと速くします。」



森

森 さくら (総務部)

「池田さんに、中庭の鯉の名前を全部教わりました。」



金

金城 ゆい (言語研究所)

「那覇出身です。東京の雨は静かで、まだ慣れません。」

部署紹介

総務部

会社の「いつも」を守る部署



受付、郵便、備品、会議室の予約、社内行事、そして本社中庭の管理。総務部は、会社の「いつも」を支える部署です。部長以下5名。社内のすべての印章をお預かりしているのも、総務部です。

入社17年目の池田さんに、仕事の心がけをうかがいました。

「決裁のハンコは、すべて総務部でお預かりしています。押す前に、一度だけ深呼吸をします。押したら、もう元には戻せませんから。」

★ 中庭だより

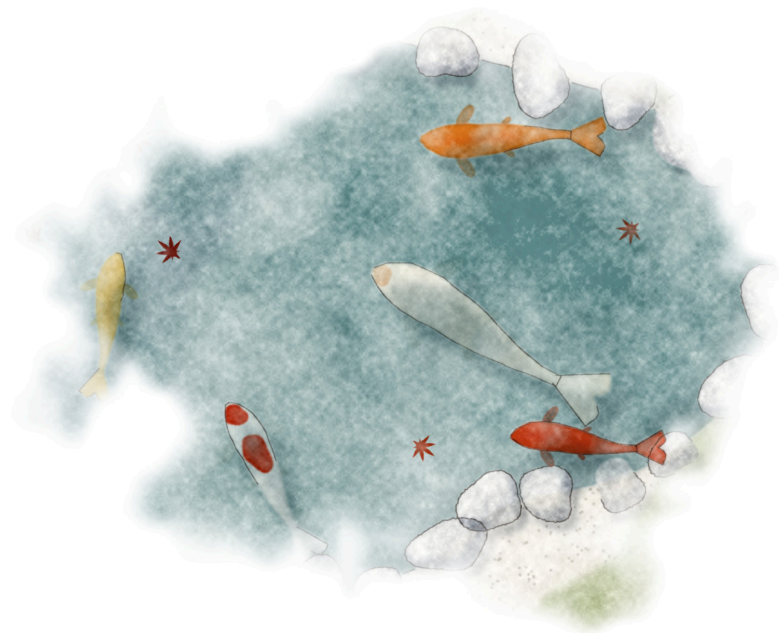
総務部 池田

今年の夏は暑い日が続きましたが、中庭の楓は、九月の終わりから少しずつ色づきはじめました。池の鯉は十二匹、みな元気です。いちばん大きな「大福」は、今年で十四歳になります。

六月の雨の夜には、今年も池に蛙が戻ってきました。毎年どこから来るのか分かりませんが、梅雨になると、必ず戻ってまいります。言語研究所の金城さんが、その声を録音していました。

四年前、新しいロゴマークを作っていただいたとき、デザイナーの方が、打ち合わせのあと、しばらく池を眺めていらしゃったのを覚えております。何をご覧になっていたのか、うかがいそびれてしまいました。

秋の夜長、会議室の窓から、中庭をご覧になってみてください。



編集後記

創業25周年記念号をお届けします。ご寄稿いただいた皆さま、ありがとうございました。次号（Vol.88）は、2013年1月の発行を予定しております。（編集担当 経営企画室）

社内連句会 第三〇〇回

2012年9月28日（金） 本社4階 大会議室

歌仙『月を待つ』の巻 表六句

三百の 座を重ねけり 月を待つ

池のほとりに 芒一本

虫の音を 拍に起こして 夜の更けて

借りし辞書から 栞ひとひら

一行を 声に出しては 消してみる

受話器のむこう 笑ふ声する

執筆 池田

西帆 下萌 南風 秋声 待庵 森羅

※全三十六句は、総務部にてご覧いただけます。

バックナンバーのご案内

Vol.86	2012年夏号	特集「取扱説明書の言葉」
Vol.85	2012年春号	特集「新年度の抱負」
Vol.84	2011年冬号	特集「ウェブサイトをリニューアルしました」
Vol.83	2011年秋号	特集「ワークベンチ Ver.4.1」
Vol.82	2011年夏号	特集「深川の夏」
Vol.81	2011年春号	特集「通訳の現場から」
Vol.80	2010年冬号	特集「言葉と季語」

※Vol.72（2008年冬号）は、発行を見合わせました。

※バックナンバーは、当社ウェブサイトからダウンロードいただけます。



株式会社 トットリガチ 言語解決社

〒135-0033 東京都江東区深川三丁目8番7号 トットリガチ深川ビル

TEL 03-1987-0401 FAX 03-1987-0402

<http://www.tuturigachicorp.com/>